NEWS Letter

Enjoy!! NOZAWA Life !!

KEN TIMES

2024年 8月号

Contents

p08／今月のインタビュー
有限会社シュネー代表の古川知也君だぜぃ。

p02／日常、あれこれ
p06／サウナ紀行②
p14／バックナンバー
p15／プロフィール
p16／本の紹介

←大人になった今、ヘラ釣りの一つの楽しみとして「道具集め」があります。
中古でお宝を発掘する喜びのために、ほとんど新品は買いません。ヤフオク、メルカリ、リサイクルショップ…偶然の巡り合わせが楽しいのです。

ヘラ再開

今までに熱中したものは？と人に聞かれたら「ヘラブナ釣り」と僕は迷わず、その一つとして答えます。小学5年から中学2年ぐらいの間でしょうか。今考えてみると、意外に短いものですね。

初めて行ったのは、たしか低学年の頃か…父と双子の弟が一緒だったかと思います。北竜湖の藪の中を降りて、湖の淵に腰を下ろし、「竿掛け」は落ちている木の枝の二股のところを短く折り、足元の土に突き刺しました。初めて見る、釣りの「構え」でした。

しばらくすると、僕と弟は、ピクリともしないウキに見切りをつけ、藪の中へと遊びに消えました。子どもですから、釣れなければすぐに飽きて他の遊びを始めます。その後も何回か連れて行っていってもらいましたが、釣れた記憶はありません。

しかし、何か惹かれるものがあったのでしょうね。いつからか、一人で自転車に乗って北竜湖へ向かうようになりました。それも、まだ下手くそだし、釣れないと恥ずかしいからと、友達とは行かずに一人で。学校の始まる前に一人で北竜湖へ行き、じっとウキを眺めていました。これも今思うと、とびきり贅沢で充実した時間ですね。あの日、初めて釣れた時の興奮は忘れません。「う～お！釣れちゃったよ！」と、そもそも釣りに来ているのに、釣れたら逆にどうしていいかわからなくなったのを覚えています。

お昼は、息子と力力の手作り弁当

その朝は続けて２匹釣れました。

自信をつけた僕は、その後みんなと一緒にやるようになり、そこでやっと自分の釣りスタイルのなかなか釣れない原因について知ることになるのでした…。売店でよく流れていたBUMP OF CHICKENの「天体観測」を聞くと、今でも当時の情景が鮮明に浮かびます。その時の息づかいまで聴こえるぐらいに。

あれから23年。……戻ってきました。同級生の亮一くん（以前、事業主インタビューにも登場してくれた。なかなかいい男なのでHPからそちらもご覧ください）からの誘いをキッカケに。静かな湖面に浮かぶ「ウキ」の動き、湖の周りから聞こえてくる鳥やウシガエルの声、風の音…五感が刺激されます。初日から型の良いのを上げました。花を持たせてくれてありがとう。

帰り道、練り餌のにおいが残る手で握るハンドルが、自転車から車になったことで、自分が大人になったのを実感しました。

ホタルイカ

各地（極めて近所の）から、「今年は豊漁だ」という声が聞こえてくるのもあって、10年ぶりぐらいにホタルイカを取りに行ってきました。毎年、行きたいな～とは思いながらも、スキーシーズンが終わったばかりの時期に、なかなかずくが出なかったのです。取りに行ったことのある方は良くわかると思うのですが、当たれば「わんさか」外れれば「からっきし」なんですよね。外れた時には、まだ冬の余韻が残る海水と潮風がより冷たく感じるものです。

初回（結局２回行った）、まあまあ。「わんさか」とは行きませんでしたが、深夜１時ごろの到着から赤黒いお宝（ずっと光っているわけではなく、網で掬った時に青く光る）に出会うことが出来ました。2時間ほど取って帰路につきました。徹夜あとでも、やはりそれなりに取れた日の朝日は清々しく、少し誇らしい気持ちで帰り道の景色を眺められるものです。妻は、滅多にない夫の功績を讃え、稀に見る上機嫌で友人知人にそれを包むのでした。（もっと早くこの重要なミッションに気づくべきだった…）

我が家の分はあまり残りませんでしたが。しかし、取れたてはやはり格別です。ただボイルしただけでも、絶品。日本酒と「沖漬け」には、この世の幸せ感じずにはいられません。これ以上の組み合わせが他にあるのでしょうか。

2回目、空振り！やはり春の海の冷たさが、より過酷なものに感じました。ウェダーが一つしかなかったものですから、友達とじゃんけんをした結果、僕はウェットスーツで海に入ることに（負けたということです）なりました。波の音が虚しく感じます……。

耐えかねた僕は、流木を集め、焚き火を始めました。「アイロンのある風景」という村上春樹の短編小説のことをずっと思っていました。「三宅さん」が、意味もなく真冬の海で、ほぼ毎日のように焚き火をする話です。…三宅さん、確かに極寒の海での焚き火は、粋なものですね。これこそが人類にとって一番意味のある行動です…。その焚き火で焼いた、一人１匹のホタルイカの味を、僕らは一生忘れないでしょう。

マレーシア Malaysia

南方見聞録

パワー溢れる南国の植物、見たこともないフルーツの数々、そしてそこに住むちょっと控えめでやさしい人々…。ここは熱帯の国、マレーシア。

スキーシーズンも終わりが近づく２月の終わり頃、同級生からの「マレーシアに行かない？」という突然の誘いに「行くか。」と答えたのは『DIE WITH ZERO』という本の影響が大きかったです。名著ですので皆さんも読んでみていただけたらと。

今回は、冬に同級生家族のペンションで働いていた、マレーシア人のリーさんが約２週間の旅をアテンドしてくれました。顔の広いリーさんのおかげで、相当いろんなマレーシアをお得に快適に楽しむことが出来ました。

7歳になる長男を連れて行けたことが良かったです。彼の年齢を考えると、成人するまでにあと11回しか夏が来ないんだ…。（なぜか、いつも夏の回数でカウントしてしまいます。僕は夏が好きなのです）と、ひどく人生が短いものに感じます。

……いや、マレーシア良いですよ！まず食べ物がうまい。だいたいスパイシーなものが多いのですが、俄然僕は合いますね。今まで行ったことのある海外の中では一番です。そして外食してもなんと安いこと！だいぶ物価は上がってきているようですが、食事に関してはそれでも安いです。そして圧倒的なフルーツの種類。ドラゴンフルーツ、マンゴー、チク、マタクチン、パッションフルーツ、マンゴスチン、ドリアン、ランブータン、グァバ…。「食べたことあるリスト」がこの旅で一気にが増えました。市場で、溢れるばかりに積まれたそれらのフルーツを見ているだけでも元気になります。その場で手際よくカットして差し出してくれたマンゴーの味は「うんーまっ！」としか言いようがありません。宮崎空港で１個5,000円で売っていたマンゴーが頭から離れませんので、ここぞとばかりに貪りました。

ティオマン島のエメラルドグリーンの海も、とびっきり綺麗でした。シュノーケリングで見える海の世界は、まさに楽園です。実にさまざまな生物が悠々と日常を楽しんでいます。その日常に我々も溶け込んでみると、まるで脳みそのシワが解きほぐされていくかのようでした。ビール、日光浴、シュノーケリング、ビール、マッサージ、プール…。これまた楽園です。

もちろんここでは書ききれませんが、とても濃密で、マレーシアのエネルギーをたっぷりと貰えた素晴らしい旅でした。自分の視野を広げ、違った価値観を持つのに、海外旅行ほど手っ取り早く、効果のあるものはありませんね。リーさん、シュネーファミリー、そして日本に残って宿の仕事をしてくれた家族に心から感謝です。次回はみんなで行きたいな～。

野沢

サウナ紀行②

【ハネサウナ編】

サウナの真髄は水風呂にある――。「サウナー」のあなたには、この常識を言うまでもありません。ハネサウナの水風呂は、その立地条件を活かし、ダイナミックな設計で湯沢川支流に通じています。平均水温シングル９℃――。100%天然、100%「新品」の水が、火照った身体の毛穴からダイレクトに染み込みます。

湯沢川支流――。
最上級の「ととのい」

「羽衣」ゼロの快感
野沢の天然水100%

せせらぎが
なんとも贅沢な音……

周平さんお手製のウッドデッキ。ととのい椅子も申し分なしの座り心地&寝心地です。僕は雨の日に、雨粒を直接身体に受けながらととのうのも好きです。

丁寧に積まれた薪は、初めての方でも簡単に着火出来るようにカットされています。ストーブに継ぎ足していく作業も、ハネサウナの一つの楽しみ。

熱と冷。
繰り返して、
「新品の自分」になる。

もう何もいらない…

平均水温シングル9°C――。

初回の入水であなたはもう十分に「ととのう」でしょう。2回目の入水で、あなたの意識は野沢の森へと溶け込み、その回収は不可能となるでしょう。自らの鼓動が、森の心音であったことに気づきます。

ハネサウナのもう一つの悦びは「自らの手で作る」というところにあります。火を入れて、薪を焚べる。人類古来からの作業が、我々を本能的に落ち着かせ、感覚をより繊細なものにします。これにより、今まで感じたことのない「最上級のととのい」を味わうことが出来るのです。

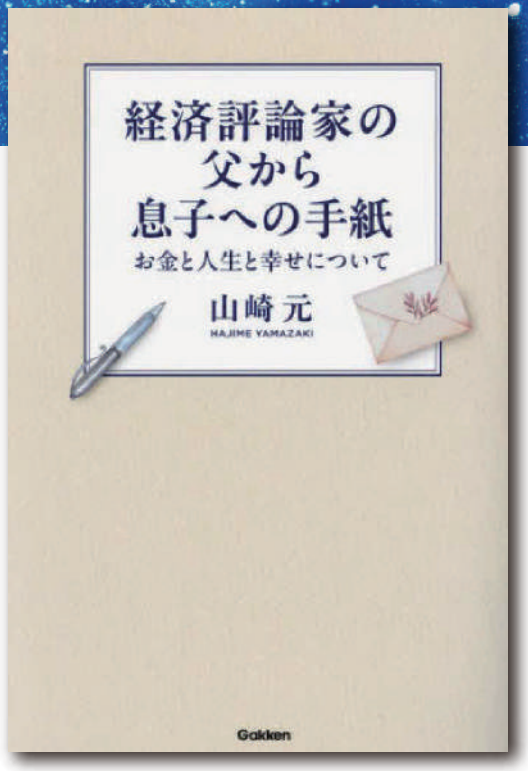
ちょっと手間だな、と筆者も最初に思ったのは事実です。しかし、全く持ってそれが覆されたのは、本当に簡単だったから。細やかに行き届いた手入れと気遣いがあるからに他なりません。

「…もう何もいらない…」

デッキの寝椅子で外気浴をしていると、言葉にもならないその声が、脳内から聞こえてきます。ぜひ大切な人と、とっておきのひと時を。一生忘れない時間になります。

ハネサウナ、周平さんと可奈絵さんの愛を感じます。

夜な夜な
本と酒とひとりごと



非常に良い本です。

僕は、「これ、読んでみな」と、将来この本を子どもにも渡すことにしました。

むろん、いつ何が起こるかがわからないのが人生ですので、妻にちょっとした遺書のようなものは書いてあります。いえ、遺書なんて大袈裟ですね。LINEのノートに、証券、銀行、保険などがどこにあるか、ちょっとした「メモ書き」です。そのメモ書きの中にこの本を加えました。

自分の子どもに「働き方」だとか「稼ぎ方」だとか、「運用」、「人生の考え方」……なんて話をするのは、まだしばらく先のことでしょう。(というか、そんなの自分でもまだわかっておりません。し、そんな話、一生しないのかもしれません)そんな中で、今自分の考え方に最もしっくり来るものをメモしておくことが、唯一ぼくに出来ることです。

この本は山崎元さんという、最終的には経済評論家であった方が、その息子さんに遺した手紙となりました。おもには、資本主義社会での仕事との向き合い方を、端的に、山崎さん特有の歯に衣着せぬ表現で綴られています。曖昧ではなく、本質のみが抽出して書かれているのですが、ほとんどのことを網羅しているようです。素晴らしいのは、最後に「幸福論」について書かれていること。さすがは山崎さん、幸福についてもかなり深くまで考え、言語化されています。

たいていの場合、子どもたちには伝えたいことの半分も伝えられないまま歳を取るように思います。だから僕は「これ、読んでみな」と、将来この本を子どもに渡すことにしました。

Contact Address

【連絡先】河野 謙（こうのけん）

住　所／ 下高井郡野沢温泉村豊郷9829(横落・Fujiyoshi)
携　帯／ 080-1294-5162
メール／ fp.konoken@gmail.com

その他 LINE、facebookのMessengerでもどうぞ！

「河野謙」でホームページ検索!!